かさおか自慢　子ども新聞

笠岡地区
まちづくり協議会
文化部会
子ども新聞部

遍照寺の『多宝塔』

特別取材 安東先生のお話

七月二十八日に笠岡中央公民館の研修室で、笠岡市の文化財についてお仕事をされている安東康宏先生から多宝塔のお話を聞きました。

お話の内容や多宝塔の中の様子などを見て、新聞にまとめましたので読んでください。

笠岡のシンボル

昔から遍照寺の多宝塔とイチョウの木は有名で笠岡の町の人から大切にされてきました。岡山県には四つの古い多宝塔がありますが、笠岡の多宝塔だけが国の重要文化財に指定されています。

そのわけは、

一．岡山県で一番古い。

二．中にきれいな絵がたくさん残っている。

三．石碑に建てた時の年号がほってある。

年号の石碑

多宝塔という名前は、「多宝如来」という仏様の名前からとったものです。宝物がたくさん入っているから多宝塔というのかなと思うかもしれませんが、宝物とは何も関係ありません。

昔の人は多宝塔の方を向いて手を合わせ、「みんなが幸せになりますように」と拝んでいたそうです。

（六年　金山　愛）

雨や風や地震に耐えた四百年

多宝塔は、およそ四百年前の一六〇六年（江戸時代のはじめ）にできました。笠岡を治めていた小堀正次がお寺を大切にしようと遍照寺に土地を寄付しました。

お寺の住職は、仏様のおかげをもらって笠岡の町をますます栄えさせようと思い、さっそく多宝塔を建てました。

私は小堀氏はとても信心深い人だったのだと思いました。そして、小堀氏が残した文化ざいをもっと大切にしようと思いました。

くずれない土俵

一階の床下にある土俵のようなものは亀腹といいます。土を棒でつきかためて作り、石のようなかたさです。塔をささえている土台で、地面より高くなっているので柱がくさりません。だから雨にも風にも負けずに四百年もの間たおれなかったのです。

亀腹（土台）

じょうぶな組み木

多宝塔は、とてもじょうぶです。なぜかというと、木と木を組み合わせて作っているからです。

くぎを使うとさびて色が茶色にかわり、しまいにはおれて、塔がこわれてしまうからです。

（四年　金山　瑞）

組み木

仏様の棒

屋根の先のグルグルの棒は、多宝塔のシンボルで「相輪」といいます。

「相輪」は、仏様のお墓の印で、銅でできています。

「相輪」の一番上には、宝珠という珠がついています。この珠は、こまった事を取りのぞき、願いをかなえてくれるといわれています。

「相輪」にはもう一つ役目があり、それは、風や地震に弱い塔を上からおさえてたおれないように守ることです。

てっぺんの棒

天井の穴の中

上がれない二階

多宝塔は二階だてのように見えますが、実は一階だてです。真ん中の手すりが付いた丸い部屋はただのかざりで、階段がないので登ることができません。

なぜなら、多宝塔は仏様をおまつりする建物ですから、人が登るように造られていないそうです。

二階の丸い建物の中を天井の穴からのぞいて見ると、太い木や細い木がたくさん組み合わせてあるだけです。人が入るすきもありません。

貝の屋根

屋根の上にもう一枚、貝の形をした屋根がついています。これはその上の丸い部分とのすき間を埋めるため作られたものです。

多宝塔を造る時の一つのきまりだそうです。

きれいな塔の形は、いろいろな工夫から出来上がっており、昔の人はすごいなあと思いました。

（四年　田中　希莉子）